貞操観念が逆転して童貞女子がエッチに飢えた学園

黒名ユウ
挿絵 鬼丸ゆる

試し読み版

2DB
二次元ドリーム文庫

2DB
二次元ドリーム文庫
貞操観念が逆転した童貞女がエッチに飢えた学園
黒名ユウ
挿絵 鬼丸ゆる

登場人物紹介

月野乃々（つきののの）

図書館でいつも本を読んでいて『図書館の妖精』とあだ名される文学少女。

石黒宏輝（いしぐろひろき）

ごく平凡な男子生徒。だが、隠しきれないムッツリスケベさのせいで全くモテない童貞男子。

姫宮エリカ（ひめみや）

スケベな宏輝をからかって弄ぶちょっぴりエッチな小悪魔少女。

HEAVEN?

白鳥清香
しらとりきよか
品行方正、才色兼備、純情可憐な風紀委員長という全校生徒に慕われる完璧美少女。
滝沢翔子
たきざわしょうこ
剣道に打ち込み後輩を厳しく指導する青春少女。爽やかな性格で後輩からの信頼は篤い。
五十嵐美里
いがらしみさと
容赦ない生活指導で生徒たちから恐怖される鬼教師。
REVERSE!
普段は生真面目だが人目を避けて校内自慰に耽る変態少女。
REVERSE!
恋愛経験がないことを焦りやらせて土下座までする処女。
REVERSE!
露出過多なタイトスカートで男子へのセクハラを楽しむエロ教師。
IS IT NOT

第一章　青風学園の五大美女　007
第二章　女たちがエッチに飢えた世界　032
第三章　図書室の妖精はムッツリスケベ　056
第四章　エロ女教師にお仕置きを！　106
第五章　風紀委員長はド変態!?　145
第六章　女子剣道部主将のチェリーな悩み　190
最終章　幼馴染とラブエッチ！　233

「そっかあ……それじゃあ仕方ないな。次は何をしたい？」

……数分後、宏輝は乃々のベッドに鎖で縛りつけられていた。

「あ、あの……乃々ちゃん？　これは一体……」

『……そなたはこれから身も心も妾のものとなるのダ』

「いや、なるのダ、じゃなくて……」

「もうっ！　教えた通りにちゃんと言って下さいよ!!　アーロンドの台詞はそんなんじゃありません！」

乃々がぷうっと頬を膨らませる。

両手両足を大きく開いてそれぞれベッドの四隅に繋がれ、全裸に剥かれた上で仰向けに寝そべる宏輝。そのお腹を跨いで、ピンクのショーツ一枚の姿で膝立ちという格好の彼女。

手にはピンク色の装丁をした一冊の文庫本――『オークの姫とエルフの殿騎士』というタイトルの小説が、開かれた状態で持たれていた。

「いや、でも、乃々ちゃん……」

『姫君様とお呼びっ！』

乃々が宏輝のチンポをペチンとはたく。

「はううう！」

『高名なるエルフの殿騎士アーロンドも、オチンポは他の男と変わりないと見えるわね。

痛かったか？　それとも、思わぬ快感に喘ぎが漏れたのかしら……』
「くっ……」
『ホーッホッホッホッホッホッホッホッ！　図星のようダね！』
乃々がノリノリで口にしているのは小説の中の登場人物の台詞だ。内容からわかる通り、それは普通の小説ではなく――エッチな小説だった。
見目麗しいエルフ族の殿騎士アーロンドが、美人だが変態的なオーク族の姫に囚われた挙句、衣服を溶かすスライムをけしかけられたり、体の隅々までを検査観賞されたり……魔法の媚薬を飲まされて性器が勃起しっぱなしの体にされてしまったりという物語。
（殿騎士ってなんだよ！　姫騎士なら知ってるけど……）
そう、これも逆転だ。元の世界ではエロ物語の定番キャラクターと言える「姫騎士」は、この世界では男キャラの役割であり、それが「殿騎士」なのだ。そして、乃々はこの手の本をベッドの下の広い収納スペースが隙間なく埋まるほど隠し持っていた。
「……これぐらい、女子ならフツーですから！　スケベとか思わないでくださいね！」
……とは、その量に目を剥いた宏輝への弁だったが、その真偽は定かではない。
そして、次にやりたいことを尋ねられた彼女が思いついたのが、そのエッチな小説と同じ役になり切ってのプレイだった。
なり切りだから、全ては想像だ。宏輝はエルフの殿騎士アーロンド、乃々はオークの姫、というわけで……ベッドへの拘束も、実際は家のどこかから持ち出して来たビニール紐で

あったが、乃々の中ではストーリー通り「鎖」で繋がれているし、ここは彼女の部屋ではなく、オークの姫の居城の怪しげな調教部屋の湿った暗がりの中なのだ。

「あの、先輩……？」

我を忘れてオークの姫君を熱演していた乃々だったが、宏輝がついて来れていないのにようやく気づいて心配そうな顔を向ける。

「やっぱり、こういう女の子向けのエッチな話は面白くありませんか？」

「えっ……えと、その……いや」

答えあぐねて視線が泳ぐ。

「それとも、刺激が強くてビックリしちゃいました？」

「そういうわけじゃないけど……」

なにしろ初めてのことなので。……色々と。

しかし、気後れしている場合じゃない、と思い直す。

見上げればそこに豊満なおっぱい。ただでさえ大きな乃々の乳房は、下からのアングルだといっそう量感が強調されて絶景だ。しかも、先ほど舐めまくった唾液がまだ乾かずに濡れ光ったままなのが滅茶苦茶エロい。

そして、彼女の体を覆い隠す最後の一枚となった、可愛らしいピンク色のショーツ――ブラとお揃いで控え目な飾りのレースつき……の下に息づく女の花園は、もうすぐそこ。宏輝のチンポの上空で、ただ一枚の布に遮られただけの状態で揺れている。

あのパンツを下ろさせるには、ここが踏ん張りどころだ。殿騎士だろうが何だろうが、やってやろうじゃないか！　宏輝は腹を決めた。

「……台詞の言い方に戸惑っただけさ。でも、乃々ちゃんがお手本を見せてくれたから、もう大丈夫だよ！」

そう言って安心させ、おもむろに小説の中の殿騎士の台詞を口にする。

『ああっ……姫様！　アーロンドの、オ……オチンポは姫様のものでございます！　淫乱ドスケベ王子の奴隷チンポをどうか……あっ、ああっ……姫様のアソコで……』

それは、乃々が一番好きだと言っていた場面だった。殿騎士アーロンドが快楽に堕ちるクライマックスの所だ。すかさず乃々が反応し、オークの姫の目つきになって嘲るような冷笑を浮かべる。

『アソコなんていう言い方を教えたかしら？』

『ああっ……お許しください！　姫君様の……姫様の……』

『言えないの？　それではご褒美はお預けダね……』

『あ、ああっ……お待ちください！　ど、どうか……あ、ああっ……姫君様のオマ〇コで！　アーロンドの恥知らずな万年発情チンポをお慰め下さい！　ザ、ザーメン搾って下さい！』

『ホッホッホッ！　ついに言ったわね、禁断のその言葉を！　気品あるエルフの王子ともあろう者が堕ちたものよ！　恥ずかしくはないのか！　クククッ、さあ、もう一度、口にするのダ。妾の……何ですって？』

『ひ、姫君様の……高貴なる……オ、オマ〇コ……で』
『……よかろう！　それではそなたの精を搾り取ってやろう！』
台詞を言う乃々の息遣いがハァハァと荒い。お話の中のオークの姫君のする通り、彼女がショーツのクロッチに手を掛け、脇にズラす。
（あ……あ、あ……見える……の、乃々ちゃんの生マ〇コ……！）
ピンクの布きれから姿を現した淡い陰り。乃々の恥毛は薄めで、割れ目がハッキリと、よく見えた。役の続きでその自分の性器をくぱあと拡げ、見せつけるようにして膝立ちのまま、下腹を宏輝のそそり立つ肉棒の先に触れるか触れないかの位置で止めてみせる。
（うっ、うおおっ……あと少し……あと少しで、俺のチンポがアソコにっ……！）
ここで腰を突き上げれば、ズブリとその中へ挿入してしまうこともできるかもしれない。だが、それはルール違反だ。宏輝は込み上げる衝動を必死で堪えた。
『ねだるように亀頭をヒクヒクとさせて……それでも一国の王子なのかしら』
挑発的に、低空飛行で裂け目を前後に行ったり来たりせる眼鏡を掛けたオークの姫君。
（うっ……あっ……毛、毛が……かすった……乃々ちゃんのアソコの毛……柔らかい……）
『ウフフ……フフッ……好きなのかしら、この感触』
お話の中のシチュエーションに従って、乃々が少し腰を落とし、宏輝の怒張の付け根に、プニプニとした股肉を低空飛行させる。
柔毛のこそばゆい感触と、女の肉の息遣い。彼女の胎内へと繋がる粘膜の温度が、すぐ

そこに感じられるというのに挿れることの叶わない焦れったさが、興奮と混ざって宏輝を身悶えさせる。

（……やばい、乃々ちゃんのアソコの湿り気が俺のチンコで感じ取れるっ……挿れたいっ……挿れたいぃっ！）

あと少しの辛抱……乃々だって焦れている。本当は、もう宏輝と同じように、ひとつになりたくて堪らないのだ。お互いの結合する部分を見下ろして、期待でとろけきった顔を見ればわかる。

「ハァ……ハァ……せっ、先輩……私、待ちきれない……早く、早く挿れたいっ……童貞のオチンポ……私の膣内（なか）に、ズブズブしたい……」

オークの姫君から童貞女子へ。台詞ではない素の言葉をついに漏らして、乃々は一旦、立ち上がり、宏輝を跨いだまま、脚からショーツを抜き取った。露わとなったオマ〇コはびしょ濡れで、ピンクの裂け目からつうっと一筋、流れ出た汁が太腿を伝って落ちる。

「んっ……」

ついに我慢できなくなって、乃々は自分の指を肉襞に沈めた。

くちゅ、くちゅ……ちゅくっ。

淫靡な液音が掻き混ぜる指先のその奥から滴る。

『ハァ……ハァ……さ、さあ……慈悲を乞うのダ……何をして欲しいかを口になさい……』

やっとの思いで先の台詞を口にして、乃々が再び膝をつく。手は股間に張り付いたまま、

敏感な所を弄り続けて。宏輝は姫君に答えを返した。
『ひ、姫……その慈悲深きオマ〇コに、どうか私のオチンポを……』
二人共、口にしたのは台詞であって台詞ではなく、それはもうほとんど本心だった。
そして続く最後の部分を吐き出すようにお互い一気に言い切る。
『……オチンポを……お納めください！』
『……いいわ、挿れてあげましょう、ご褒美よ！』
言いながら乃々が腰を落とした。裂け目にあてがわれていた肉棒がぬるんっと潤滑して、発情状態の膣の中へと呑み込まれる。
「あ、ああっ……挿れてるっ……私、挿れてるぅうっ……オチンチン、食べちゃってるぅ！」
狭い膣口を割り裂く怒張の圧迫に、乃々が感極まった声を上げた。
温かい肉の中に包み込まれるその感触は、宏輝が想像していたよりもずっと生々しく、そしていやらしかった。膣内をドロドロに満たし、粘着する愛液に導かれ、繋がる二人。
ぬちぃっ……。
宏輝の先端が、わずかな抵抗を感じ取る。
「んはうぅっ……あっ……アアッ……は、初めてのオチンチンッ……当たってる……私の処女膜に……」
乃々が叫ぶ。それはもうセリフではなく、感極まった乃々自身の言葉だった。
（処女膜……これがそうなのか……！）

言われなければわからなかったかもしれない。しかし、意識してみれば、微かに受ける抵抗のようなものがある。宏輝は全ての感覚を亀頭に集中させ、その感触を余すことなく受け取ろうとした。

「あ、ああっ……裂ける……裂けてくっ……わかるっ！　ふぁあっ……処女膜……裂けてくぅぅっ……い、痛いっ……でもっ！　はぁんっ♥　す、素敵ぃ……」

み……ち、みちっ……みちちっ……グッ……プ、プチィッ……！

薄い粘膜が突き破られたその瞬間、乃々は大きく身をよじって、泣くような悦びの声を上げた。

「あ……あっ……ああ～～～っ！　破れたっ……処女膜、破れたあぁぁっ！」

破瓜の痛みも物ともせずに、そのままずぶりと腰を沈めて自らの奥へと男根を送り込む。

「やっと……やっと、処女じゃなくなるのよっ……男の人とヤれるっ……ヤッてるっ……あっ……あはぁんっ！　自分でするのじゃない本当のえっち！　セックス……セックスしてるっ！　あっ……ああっ！　オチンポで膣内がいっぱいぃぃっ！　これ好きっ！　好きなの！　あぁうっ……しゅきぃぃぃぃぃぃぃぃぃぃぃっ♥♥♥」

「う、うわああっ……は、激しいよっ！　乃々ちゃん！」

じゅぽじゅぽと淫らな音を立てて上下にピストンされ、宏輝はたまらず悲鳴を上げた。しかし、それにもおかまいなしで乃々は肉棒を思う存分に味わおうとする。陰唇と肉茎の隙間からコポコポと湧き零れる愛液が白く泡立ってしまっている。

「ひゃううっ！　ひゃううううっ！　気持ち良い！　あああああっ！　そ、そーにゅうっ……気持ち良いっ！　乃々の中から、どんどんエッチなお汁が溢れて来ちゃう……はああんっ……オチンポ凄いっ！　もっ、もっと暴れさせてあげるっ……」

乃々が尻を振り乱して宏輝の上で腰をくねらせ始めた。本能のままに、それとも、本で読んだ知識だろうか。根元まで肉棒を呑み込んだままグルグルと膣内を掻き混ぜるように下半身を躍らせる。

「当たるっ……気持ち良いトコに当たるの……あああ、チンポ最高！　えっち最高ぅっ！　んはあああ～っ！　え、抉って！　もっと抉るように深く……あ、ああああ……♥」

まるで快感の肉渦巻だ。初めてのセックスは、できればじっくりと味わいたかったが、とてもそれは望めそうになかった。

「あっ……ああっ……乃々ちゃん、俺……もうダメ……」

「はああんっ！　先輩、私も、もう……！　お願い……一緒に……一緒にイキたいです！　イキながら痙攣してる膣内で射精して欲しいです！　憧れてたんです、そういうのっ！　処女マ〇コで出されながら絶頂したい……ああっ、お願い……お願いしますっ！」

じゅぽっ、じゅぽっ……じゅぽおっ！

発情汁を飛び散らせながら、一心不乱に肉棒で掻き混ぜていた乃々の膣内が、ふわっと熱を増し、きゅうううんと締めつけを開始する。

ドクッ……！

乃々の胎内で、宏輝の脈動が爆ぜた。
びゅるっ……びゅるるるるっ！　どぴゅうううううううっ！
「ひあああああっ！　感じるっ……オチンチン、私の中でブルブルしてるう！　ザーメン出て来てるぅっ！　熱いの、膣内にかかってる！　私もっ……私もイクわ！　ああっ！　あっ……あっ……来る……！　大きいの、来るっ！　あーっ！」
胎内に広がる吐精の熱に感応した乃々が腰をバンバンと打ち下ろすと、それに合わせておっぱいも激しく上へ下へと飛び交うようにバウンドする。
「おううっ！　お胎っ……お胎の中ぁ……ズポズポ来るうぅぅっ！　ああああっ！　先輩っ！　いくっ！　私いっちゃう！　凄い！　気持ち良い！　イクの、イクの、ああああんっ……イクッ……いくぅぅぅぅぅぅぅっ！」
M字に大きく開いた股間を叩きつけるようにして、最後に激しく自分を貫くと、乃々は全身を震わせながら一瞬仰け反った姿勢で硬直し、それから宏輝の胸の中にドサリと倒れ込んできた。
「はぁ、はぁ……夢みたい……」
体から降りたあと、乃々はその身をすぐ隣にぐったりと横たえて、呼吸の整わないまま呟いた。伸ばした腕を男の胸の上で遊ばせ裸体を密着させてくる。押し付けられる乳房の弾力を楽しみながら宏輝は尋ねた。

宏輝はというと、肝心な所でミスってしまった情けなさでしょんぼり立ち尽くすばかり。
「ふぅん……いいわよ」
「えっ⁉」
「ただし、あと十年したらかなあ……」
「ええっ……」
「フフッ……さすがに教師と教え子じゃあねえ。問題あるでしょ」
そう言うと美里は教材を手に立ち上がった。
（ちょっ……問題あるって……アンタに言われたくないよ！）
いかにも簡単にさせてくれそうな格好や言動をしておいてそれはないだろう。授業だけではない、昨日だって他ならぬ宏輝自身に保健室で……。
なるほど、どうも美里は思っていたよりずっとまともらしい。表面上は痴女を気取っているが、それは男子生徒たちをからかって遊んでいるだけで一線を越えるようなつもりでやってはいないということだ。とはいえ、それはそれでいかがなものかという気もするが。
どうあれ、予定は狂ってしまった。しかし、逆に燃え上がるスケベ魂。
（くそう、楽に落せると思ったのに！　こうなったら意地でもエッチしてやる！）
「……それじゃ、授業に行くわね。あなたも早く教室に帰りなさい」
「先生、待って下さい！」
そのまま廊下へ出ようとした美里を、宏輝は背後から抱きすくめた。

「……！」

腕の中で美里が固まる。声を上げたりしないのは、やはり逆転している貞操観念のせいだろうか。

「石黒……君……？」

「授業中に言ってましたよね、素敵なご褒美が欲しかったらいつでもいらっしゃいって」

抱き締めたままサラリとしたショートヘアーの感触を頬で楽しむと、硬くなったモノを美里のはち切れそうなスカートの双臀に押し付ける。

「欲しいんです、そのご褒美って奴。それに……先生だって、本当は生徒とヤリたいんでしょう？　だからこんなエロい格好してるし、スケベな事ばかり言うんだ」

「ちょ、ちょっと……当たってるわよ！」

「当たりですか、それじゃあ……」

「違うわよ！　そうじゃなくて、当たっているのよ、あなたの……オ、オチンチンが！」

「……気のせいじゃないですか？」

やりとりするうちに調子が出てきた。やはり、さっき推測した通りで、美里は自分から仕掛ける分には強いが、仕掛けられるとなると心構えがなかったようだ。

「先生の髪……いい匂いですね」

うなじに息を吹きかけてやると、腕の中で美里の体がビクッと震え、振りほどこうともせずに動かなくなる。元の世界なら叫んで逃げ出されていてもおかしくはないのに。

「ねえ、先生……昨日の保健室の続き……してもいいんですよ」
「あ、あれは……からかっただけなのよ。いけない……いけないわ。放しなさい……」
口ではそう言いながらも、美里の心が理性と欲望の間で揺れているのは明白だった。
それをいいことに、ヒップの丸みを確めるように押し付けた腰をグラインドさせてやる。成熟した大人の肉体の豊かな凹凸が、密着した勃起に伝わってくる。ということは、逆に美里にも宏輝の股間の猛りが十二分に感じられたはずだ。
「今度は気のせいじゃないですよ。俺のここ、先生とエッチがしたくて……もうこんなになっちゃってます」
「ンッ……うっ……そんな……やらしい……でも駄目……教師と生徒なのよ、私たち」
吐息と共に漏れる、美里の艶めいた微かな呻き。
(感じてる……よし、感じているぞ!)
思うに、この世界では男がエッチに消極的なのだから、いくら彼女が挑発的でもそれに対して乗ってくるような男子はいないのだ。だから、過激な見かけをしてはいても、いざこうして押しの強い攻勢に出られると免疫がないのかもしれない。
意を強くして宏輝は美里の耳元に低い声で囁いた。
「先生だって、考えたことあるんでしょう? 学校で、生徒と……女のロマンですもんね」
「……!」
再びビクンッと美里の体が反応する。どうやら図星だったらしい。

「密かに憧れていたんじゃないですか？　神聖な学び舎で、教え子の体を、好きにしてみたいって……」

わざと背徳感を煽るように言ってやると、腕の中の女体が熱を帯び始める。

「だ、駄目よ……そんなこと……駄目」

「二人だけの秘密、作りませんか……？」

そう言って手をゆっくり胸の所まで這わせ、大きく開いたブラウスの襟元から谷間へと指先を滑り落として乳首を探り当てると、美里はうわずった声を出した。

「あんっ……♥」

「こんな風にして貰いたかったんでしょう？」

柔らかいただのポッチだったものを、少しだけ力を入れて摘まんでやる。するとそれは、みるみるうちに硬く尖り、抗うようなコリコリとした弾性を発揮し始めた。

「う……ううっ……駄目……私……そ、その気になっちゃう……」

「その気になって下さいよ」

くりくりと片手で乳首をいじくりながら、残ったもう片方の手をスカートの裾にかけ、めくってゆく。タイトなミニは、一旦引き上げられてしまえば容易には落ちない。

露わとなったのは薄い生地の紫のTバックだった。フロント部もほぼヒモに近いような形状で、揃いの色のガーターとの組み合わせが、エロさをいっそう引き立てている。

「うわあ……下着も、こんないやらしいのをつけてるんですね」

後ろから抱いているのでよく見えない分、手を伸ばしてじっくりとまさぐると、そこはぬちゃりと肉が溶けたようになっていた。ぶるると体を震わせて美里が色っぽい喘ぎ声を吐き放つ。

「はあ……んっ……い、嫌……み……見られ……ちゃった……は、恥ずかしい……あっ、ああんっ……先生のいやらしい下着……見ちゃいやぁ……」

ハミブラを見せつけるような着こなしをしておきながら、これを恥ずかしがるとは？しかも、言葉とは裏腹になんだか悦びを感じているような声色。どうやら、これが美里の急所のようだ。見せつけるような格好は勿論、性的興奮を得る為なのだろうが、同時に、見せていない部分……というのも、彼女にそれ以上の快感をもたらしていたのではないか。

教壇に立ちながら、心の中で――あなたたち、私がどんな下着をつけて授業しているか、わかるかしら？　と、そんな密やかな愉しみにふけっていたに違いない。

そんな想像をしながら、女教師の熟れた蜜壺に指を這わせて、宏輝は違和感に気づいた。

（ん……？）

この肉の感触……。

そう、肉の感触しかない。いきなり肉。つるつるの……。

「先生、もしかして、毛……剃っているんですか？」

女教師の秘めた大人の部分、そこは幼女のような無毛であった。

美里はパイパンにしていたのだ！

「そ、そうよ……ああんっ、それも知られちゃった……あうっ！　だ、駄目……弄っちゃ……剃ってあると、す……凄く感じやすいの……あっ！　んはぁうううっ！」
弄っちゃ駄目と言われて大人しくそうするわけがない。
「ハハッ……凄いや、指がスルッと入っちゃう。毛がないから膣内から溢れて来る愛液がそのままダラダラ滴り落ちて……お漏らしをしてるみたいですよ」
「ああん……や、やめて！　そんなこと言わないで！　私、教師なのに……生徒にそんなことを言われるなんて！　あっ……ああっ！　くふうっ！」
実際、それはお漏らしと大差なかった。ビチョッ、ピチョンと雫が落ちて、教員控室の床に水たまりを作ってゆく。
「こんなに感じているのに、まだ駄目って言うんですか？」
そう言いながら宏輝は二度、三度と無毛の入口に指を出し入れする。愛液を押し止めることのない無毛の恥丘は、水浸しとなって性器への異物の侵入を簡単に許し、トロトロの膣内を行き来される快感に美里が呻き、喘ぐ。
（パイパンって、見た目がエロいってだけじゃないんだな……本当に先生にお似合いだ）
昨日の乃々とのエッチで女は想像以上に濡れるものだと知ったが、美里の濡れっぷりはそれ以上だ。ダラダラと滲み出すいやらしい液は、尽きることがないようだった。
「あうんっ！　はぁっ……あっ、あっ……駄目ぇっ……そっ、それ以上は……それ以上は……ああんっ、くぅんっ！　んっ……堪えきれなくなるからぁっ……」

拒むというより、甘える感じの息遣いのほうが多くなってきた美里が、体のほうも、宏輝の腕に上体の自由を奪われながら尻だけは指の動きに合わせて左右に躍らせ始める。
「もの凄いヨガリっぷりですね。やっぱり先生はこういうことしたかったんだ」
「ち、違う……お、女は皆……そういうものなのっ……こ、こんなことされたらぁっ！」
くたっと美里の体が落ちそうになる。
それを支える形で前にまわり込んだ宏輝は、美里と真正面から見つめ合うことになった。
「先生……今の顔が一番ステキですよ……」
トロけきった牝の顔。眼鏡の向こうで潤む瞳。これが本当の発情なのだと思った。
痴女まがいの振る舞いに感じたエロさとは似て非なるもの。睫毛が、唇が、鼻先が……淫猥な期待に震え、欲しいと言っている。口ではなんと言おうが、本能が求めている。
「馬……鹿……言わ……ないで……」
言葉とは裏腹に、美里が目を閉じる。それはつまり、許可のサインだ。
宏輝は奪ってやった。そして、教え子の侵略に応じる女教師の唇。
昨日、乃々にされたガッツクような童貞女子のキスとは対照的に、それは落ち着いた、しっとりとした密着だった。まるで唇から何か意思を読み取ろうとするかのようになぞる、濡れた舌の丁寧な動き。
「んくっ……チュッ……はぅ……ンッ……」
ちゅる……ぷちっ……。

水音も、ときおり唾液の水泡が弾ける程度の静かなキスだった。
いつの間にか、宏輝は美里に両手で頬を挟み込まれていた。火照った肌に女の細い指が、ヒンヤリとして、くすぐったくも心地良い。そしてそのままちゅくちゅくと口を吸われる。
（あ……上手い……こういうのも……良いなあ……愛がある感じ……）
主導権を取り続けることを忘れて身を委ねてしまいたくなるほどだ。うっとりとして、心が溶けてしまいそうだ。
「ぷはあっ……！」
ようやく解放されて文字通りひと息つくと、真顔の美里がじっと宏輝を見つめていた。
「ほ……本当に……いいのね？」
「……ここまでしといて、念を押さなくても」
「そこまで言うなら……わかったわ。抱いてあげる……」
なんだかやっぱり、ビミョウに男と女が逆だと思ったが、美里が机の上に腰を下ろして目の前で大きく脚を広げると、そんなことはどうでも良くなった。
「来なさい……」
（スッゲ……）
誰もいないガランとした教員控室だが、授業が終われば教師たちが戻って来てにぎやかになるだろう。つい先ほどまでだって、先生たちが慌ただしく授業の準備をしていたのだ。その数分後に、同じ場所で、女教師が脚を開いているのだ。同僚には決して見せられない

姿を、自分にだけ披露してくれているのだ！
ガーターと網タイツに彩られた絶対領域の更に奥には、申し訳程度に股間を覆う、紫のTバック。その極わずかな布の部分はメッシュになっており、熟れた肉筋を透かしている。
淫らな下半身の状態に対して、上半身はそのままというのもこの光景をいっそういやらしいものにしていた。
「早く……授業が終わっちゃうわよ」
見とれている宏輝に焦れたように美里が机の上で腰をくねらせ、自分でショーツに手を伸ばし、誘うように横にずらして、ただ縦筋だけがある恥丘をヒクつかせる。
「私だって……もう、待ちきれないんだから」
「五十嵐先生っ……！」
曝け出された肉裂を目にして、いても立ってもいられなくなった宏輝は一瞬でズボンを下ろして肉棒を解き放った。そのままの勢いでタックルをするように、美里にむしゃぶりつき、机の上に押し倒す。
「ああんっ！」
驚きなのか悦びなのかわからない声を上げて、美里もまた宏輝の体にしがみついてきた。腰をあてがう動きに合わせて肩に手を回して尻を浮かす。急いた息がお互いの頬をねぶり、その思わぬ熱さが、今、自分たちがしていることがリアルなのだと実感させる。
「挿れるよ、先生っ……」

「いいわよ……は、早く……！」
立った姿勢での挿入に手間取る宏輝を手伝って、美里がもどかしげに肉棒を割れ目へと誘導する。くちょっと音をさせて、あの水のような肉に亀頭が接着した。
（あ……あの五十嵐先生と……）
元の世界では真面目を絵に描いたような女教師が、生徒とセックスなど絶対あり得ない彼女が……今、淫らな肉の中に自分を受け入れようとしている。この挿入は感慨を込めたひと突きになるだろう。心して味わいたい。宏輝はじっくりと時間をかけて、ゆっくり、ジワジワと腰を進めていく。
にゅぷうっ……ぐ、ぐぐっ……ずぬぬっ……。
「あ……あ……挿って来る……んくぅっ……教え子のオチンチン……いけないことなのに……あっ……ああっ……届く……奥にっ……う……はぁんっ、あっ……あっ……」
絡みつく膣内の肉襞を掻き分けて、宏輝の勃起が美里の下腹に収まってゆく。
「お……ぅん……ああ、私……繋がってる……生徒のオチンポ、呑み込んじゃってる……挿れたら一番いけないチンポ……ああっ！　なのにどうして、こんなに感じるの⁉」
背徳の快感に堪えかねたような、訴えかける切ない瞳。それはせがんでいる目だ。どうしようもないときに女が見せる顔だ。宏輝にも、もうわかるようになっていた。
「いけない先生だね。聖職者なのにオマ〇コにこんなの頬張らせて……」
「い、いけないのはあなたよ！　私を誘惑して……んふぅっ！」

宏輝は腰を動かし始めた。美里を机に乗せて、立ったまま挿入しているので角度がつけやすい。膣内のあちらこちらを抉るようにして腰の押し引きを試してみる。
「アッ！　んあっ！　はあっ！　ああっ……ああああっ！　気持ちいいっ！　もっと……もっと、突いて！　はぁんっ！　素敵っ……学校で生徒に突き回されるの、素敵ぃっ！」
「十年早いんじゃなかったんですか？」
「んはああああっ！　い、意地悪言わないで……だって、だって……しょうがないじゃない……教え子と……ふ、不適切な関係を持つわけにはいかないんだからっ……アンッ！♥」
「ん？　なんかいい声が出ましたよ。ここかな？」
甘い声が出た時に突いた角度をもう一度。少し深く入れた腹側の位置だ。
「はあぁぁぁあんっ！　いやっ……そ、そこっ……凄く感じるっ♥　あっ、くはぁっ……だっ、駄目ぇ……そこばっかり駄目えぇっ……」
「駄目じゃないでしょう。だって、ここを突くと先生のオマ〇コ、キュッてなるんですよ。ほら……クッ……この締めつけ、たまんないな」
締めつけというか膣道全体が、ぶるんっと揺れるような感じだ。急所を突くと、女体はこんな風になるのか。美里がますます不適切な艶声を上げる。
「ふあっ……駄目ぇっ！　駄目えぇっ♥　駄目よおっ……アッ、ハッ……感じちゃうっ♥　そこっ……アアッ！　好きっ！　んはあっ！　あっ、またっ♥　はあっ！　あ、ああ……またっ♥　ウンッ……ンンッ！　ふぐっ……ああ、キュンキュンするわ……子宮が痺れて

キュンキュンしちゃうぅっ！」

それほど激しく突いているわけではないのだが、感じる角度で肉棒を深く沈み込ませ、グリグリ揺すってやると……悶え方が全然違う。もともと教師らしからぬ風貌の彼女が、ますます教育者からかけ離れた、一人の女に――いや、牝になっていく。

「はあっ……はあ……先生、素敵だよ……エロい顔で喘ぐ先生、凄く魅力的だ」

宏輝は美里のブラウスのボタンを外し襟首を引いて両肩を露出させた。服からはみ出ていた赤色のレースの縁の部分と、カップの下半分が紫のツートンカラーのブラジャーは、Tバックのショーツと比べればまだ布の面積は多かったが、やはりメッシュ地で、肝心の所が透けて見える扇情的なデザインなのは同じだった。

服の上からでも見て取れた通りの、ボリュームたっぷりの乳房をグイと掴んで下着ごと揉みしだく。

「あはあっ、激しいっ……」

「これだけいやらしいブラジャーですからね……すぐに外してしまってはもったいない」

赤に紫の透ける下着、そして肌の白と肉のピンク。机の上の美里は淫らな生き物の色彩だった。周りに散乱してしまった教科書やプリント、それらとのコントラストが、猥雑なことこの上ない。メッシュの下で乳首がピクピクと蠢く様をじっくりたっぷりと愉しんで、それから宏輝はカップをめくり返し、ブラを彼女のお腹のほうへと押し下げた。

ついに露わとなった女教師の不適切な乳房は、横幅に張りのある二十代の成人女性の、

しかしそれでいて瑞々しさをたっぷり備えた美しい形をしていた。
その美しい形を手の中でぐにゃりと歪ませる快感。力一杯に直揉みをしながら、先ほど見つけた膣内の敏感なポイントを、何度も激しく突き上げる。
「んあっ♥　あっ♥　あっ♥　くふぅっ……あっ♥　あっ♥　凄いっ！　あふっ♥♥　んはあ～っ！　ああ、ああ～っ♥　やぁんっ！　おっぱいとオマ○コ、同時にぃぃっ！　ジンジンするっ！　お乳もアソコもっ……ブルブル来ちゃうっ！」
たまらず大声を上げた美里が体をくの字に折り曲げてしがみつく。万力のような力で、宏輝の腰に巻きつけた両脚をガクガクと痙攣させて、胎内で感じている快感を伝えてくる。
「先生、可愛いよ！　先生がこんなにエッチで感じやすいだなんて知らなかった！」
「エ、エッチなのはあなたよおっ！　ああっ……ダメッ……イッちゃう……教え子に……イカされちゃうっ……わ、わたしっ……教師失格になっちゃうっ……」
「イキなよ！　イッていいよ！　先生のイクとこ見せてよ……」
「おっ……男の子が、そんなこと……言っちゃ駄目ぇっ……わ、私が言いたいのにぃぃっ……でも、ああ駄目っ……イクッ！　ンあ、ああっ……もう来ちゃうっ……来ちゃうぅっ！」
ひときわ大きく叫ぶと、美里は四肢の全てで強くしがみついてきた。ヒールパンプスが脱げ落ち、タイツの網の下でマニュアの鮮やかな爪先がきゅっと折り曲げられる。ふたつの体を無理矢理にでもひとつにしようとするかのような大好きホールドの体勢だ。

第六章　女子剣道部主将のチェリーな悩み

日曜日。

宏輝はソワソワと時間を気にしながら駅の改札前にいた。

（なんかデートの待ち合わせみたいだな……）

実際、デートと言ってもいいのかもしれない。彼が待っている相手は白鳥清香だった。

先週のあの日、彼女は写真だけ撮って、それ以上のことはしなかった。

てっきり、最後までできるものと思っていた宏輝は肩すかしをくらった気分だったが、帰り際に清香は言ったのだ。

「……続きは今度の日曜日にね。私も色々と準備をしたいから」

続きというのは当然……。

（つ、ついに……白鳥先輩と……！）

上下逆さまではなく、正しい向きで合体。

教室で見せて貰ったあの処女膜を、純潔の封印を、自分のモノが破るのだ。

こちらの世界では変態チックな欲望を持て余し気味で、盗撮――あの後、カメラを外すよう説得するのがひと苦労だった――までしていた彼女だが。表向き学園内では、明るく清純な模範生として振る舞っている。元の世界の、淑女である彼女自身と同様に。

宗則のエロ本を手にして顔を赤くしていたあの清純な……。そんな彼女がトロけた顔でペロペロと美味しそうに自分の尻の穴を舐めてくれた。そう思っただけで股間が熱くなる。

待ち合わせの改札前で浮き浮きしていると、ホーム側の構内から清香が姿を現した。

（いっ……良い……！）

初めて目にするその私服姿に宏輝は思わず目を奪われた。

残暑に涼しげな白のワンピース。風に揺れる女らしいふわりとしたフォルムの中では、これまた素晴らしいプロポーションがシルエットとなって映えている。

シンプルなノースリーブが、飾らないナチュラル美少女的な容貌によく似合っていた。

「石黒君、お待たせ！」

ニッコリと微笑まれると心が溶かされそうだ。

（本当にデートみたいだあ！）

思えば女の子とデートをしたことがない。セックスもしたいが、それ以上にこのシチュ……待ち合わせてのお出かけというのはグッと来るものがある。しかも、相手は飛び切り可愛い、アイドルグループだったら間違いなくセンターの器量である！

（それなのに、ＣＤも買わずにこんな……うへへへっ……俺はなんて幸せ者なんだ！）

……チンポの写真は撮られているのだが。

それはケロリと忘れて、締まりのないニヤけ顔の宏輝。

「……石黒君？」

「うわっと……すっ、すいません……先輩が素敵すぎて、見とれちゃってました！」
「……まあ！」
嬉しそうに清香が目を伏せる。
（うひゃあ～、はにかんでるっ……くはあっ、たまらんっ！　可愛すぎてクラクラする！）
目の前の美少女が、「エッチをさせなさい」と取引を持ち掛けてきた同一人物だとは、とても思えない。まさに、元の世界の清香に対して宏輝が抱いていたイメージそのものの雰囲気だった。
清香が改札から出て来ずに手招きする。
「さあ、電車に乗りましょう！　乗り換えて一緒に行くわよ」
「えっ……あれっ？　ここからまた電車に乗るんですか？　は……はいっ！」
言われて慌ててＩＣカードを通したその手がさっと握られる。ＣＤも買っていないのに。
（マジか……お手々繋いでデートだよ！　宏輝、か……感激ィ！）

そして手を繋いだまま、目的の駅から直行して引っ張り込まれたのはホテルだった。
無論、ご休憩とご宿泊、二つの料金があるアレなホテルである。
（ええ、そうですよね……わかってましたけどね……）
「まだ暑くて外は我慢できないわよね……」
と、ラブホの照明装置を物珍しげに触りながらうそぶく清香だったが、絶対違う。

（最初からそのつもりだったでしょう！　計画的な犯行だ！）

大体、待ち合わせが最後に降りる駅じゃないというのからしておかしかったのだ。

ここに来るまでの電車の中で、宏輝はさんざんアソコを弄ばれた。それも、あらかじめやってやろうと思ってしたことに違いない。

とはいえ、宏輝とて、もとよりエッチな行為は大歓迎だった。というか、それが目的だ。公共の場所での痴漢行為には面食らったが、ここでなら、誰はばかることなく振る舞える。

清楚な仮面の下のあの貪欲な本性……これから彼女がどんな痴態を見せてくれるのかと想像し、期待に股間が膨らむ。

（でも、ラブホでエッチ……って、どうやって始めればいいんだろう？）

初めて入った、男女がエッチをするためだけに用意された空間。全く勝手がわからない。宏輝は一人、所在無げにソファに腰を下ろして、清香も同じなのだろう……ベッドに体を伸ばしはしているものの、きっかけを掴みかねている様子だ。

この初々しさは、元の世界でも変わらないのだろうか。そう考えると、いきなりホテル直行となったこのデートも、なんだか素敵なキラキラしたものに思えてしまう。

「ああ、今日が待ち遠しかった……これでついに私も処女卒業できるんだわ」

「初めての相手が俺なんかでよかったんですか……？」

互いに、タイミングを探って言葉を選ぶ。的の中心は微妙に外して、しかし枠の外にはいかないように。

「石黒クンは可愛いから好きよ……電車の中のイキ顔も……凄くキュートだったわ」
リードを取ったのは清香だった。色っぽい口調でそう答え、部屋の灯りをムードのあるピンクに切り替える。ベッドの上で身を起こすと、女の子座りのままで体をくねらせて、クロスした腕を滑らかに持ち上げ、ワンピースをふぁさりと脱ぎ去った。
均整のとれた肢体。滑らかな白い肌。ほどよいサイズのぽよんとした胸も内股に隠れる女の子の部分も、覆うのは今日も白一色の下着だったが、光沢のあるシルク素材らしく、ピンクのライトに照らされて艶やかに曲線の柔らかさを強調する。
「ねえ、来て……」
丸い形の大きなベッドの上で脚をお行儀よく揃え直し、宏輝に向かって手を差し伸べる。
その瞳はこれからの行為に期待で潤み、艶を持って輝きを増していた。
「本当はもう、ずっと待ちきれないでいたの……」
「白鳥先輩……」
ソファから立ち上がってベッドサイドに歩み寄った宏輝は、今度こそ、自分から彼女の手を握る。何も言わず、その手をショーツの中に導き入れる清香。
そこはもう、充分にぬかるんでいた。
じゅぷ……。
「電車の中で、石黒君のオチンチンをいじっていたときからずっと……なの」
少し恥じらいながらも、しかしそういうことで相手を悦ばそうというつもりの告白。

「見せて貰えますか……」
答えは待たず、この間とは違って自分の手で清香のアソコを曝け出す。持ち上げられた腰から下ろされていくショーツと肉裂の間に、ねっとりと糸を引く発情の粘液。
その光景は、薄めの恥毛に覆われた上品な雰囲気の桃色の縦筋と淫靡なコントラストを生み出していた。
「ね……私のオマ〇コ、こんなにも欲しがって……」
清香が誘う眼つきで宏輝を見つめながら、ゆっくりと脚を開く。
これからここを、清純な風紀委員長の処女を、ラブホテルで貫く――犯すのだ。
嗜虐的な興奮が湧き上がって、堪らず宏輝は清香を乱暴にベッドに押し倒した。
「うおおおおっ！」
「ああんっ……」
荒々しくブラジャー剥ぎ取って、清香を生まれたままの姿にする。ぷるんと揺れる乳を捉まえて激しく揉みしだく。清香もまた宏輝の衣服を脱がせようと、絡みついてくる。
「裸を見せて……あ、ああんっ……石黒君のあそこもここも、全部舐めてあげる」
全裸となり、もつれ合いながら互いの体に舌を這わせる二人。
唾液に濡れた肌が重なり合い、薄暗い部屋の中にぴちゃぴちゃという雨音が降る。
愛吸（まなず）いするその唇はやがて番（つがい）となった。口吻を交わしながら、揉みしだかれる乳房……まさぐられる男の象徴。それぞれが、柔らかさと硬さを確められ、求め、そして応える。

「はあっ……もう、待てない……挿れて……いい？」
体を入れ替えて、上となった清香が頬を寄せて濡れた声で尋ねる。言葉の上では尋ねているが、どう答えようと彼女は挿入をするだろうと感じ取れる、焦がれた声色だった。
「お願い……後ろから……」
清香が四つん這いの姿勢で尻を高く掲げる。
これまでの経験で、この世界の女性は女が上になるような体位を好む傾向があると感じていた宏輝には、バックからの挿入を求められるのは意外だった。元の世界であったとしても、清純な清香がそんな姿勢での交接を望むとも思えない。これはおそらく、こちらの世界の彼女ならではの変態的欲求の一端なのだ。
そして、そんな唯一無二の機会を断る理由などあろうはずもない。猫が伸びするポーズの清香の背後にすぐさま回り、むっちりと広がった、桃のようなヒップを掴む。
「あっ……こ、これは……！」
そこには清香がバックを求めた理由があった。ボリューム感たっぷりの双臀の真ん中に飛び出た小さなプラグのようなものに、宏輝は初めて気がついた。
「うふふ……アナルビーズよ。お家からずっと挿れてたの。ううん、今日だけじゃないわ。取引が成立してから、ここ数日、馴染ませるために毎日挿れっぱなしにしていたの」
「ど、どうしてそんな……⁉」
あの日から今日まで平日も何日か入っている。学校のある日も、そんなことをしていた

というのか。お尻に栓をしたまま授業を受けたり、全校集会で生徒たちの前に立ち、風紀委員からのお知らせをスピーチしたりしていたということになる。

「準備するって言ったでしょう？　計算したんだけれど、安全な日まで待てなくて、今日エッチすることに決めたんだけど、初めてだから中に欲しくて……でも、できちゃったら困るから……」

顔を赤らめ、言葉を続ける。

「そ、それでね……お尻だったら中に……出せるかなって……準備っていうのはそのこと」

（そうだったのか、でも、その一念だけでアナルを開発しちゃうなんて……）

目の前に突き出されたプラグ。彼女は毎日、これを自分で尻の穴に入れるとき、どんな表情をしていたのだろう。そんなことを思いながら、指を引っ掛けて少しだけ抜こうしてみると、清香の口からエロい喘ぎ声が漏れた。

「あんっ……感じる……♥」

びくんっと尻を震わせて出される甘い声。

プラグの出ている部分は輪になっており、そこに指をかけて押したり引いたりするもののようだ。さっき引っ張ったときに、プラスチックだかシリコンだかわからないが、そのようなもので作られた小さな玉がひとつ、引き抜かれてお尻の中からするんと飛び出して来た。実物を見るのは初めてだったが知識として形状は知っている。この玉が大小微妙にサイズを変えて連なっているのだ……この美少女の直腸の中に。

もう一度、引っ張ってみる。今度はさっきよりも沢山。すると腸液に濡れた玉がぬろっぬろっと飛び出て、その度に清香が尻をピクンピクンと跳ねさせる。
「あっ♥　あっ♥　ちょっ、ちょっと待って……まだ抜いちゃ駄目……ああんっ♥」
最後の「ああん♥」は、抜いちゃ駄目と言われて押し戻したせいだ。引くにせよ押すにせよ、可愛らしくすぼまっている肛門が通過と同時にむにゅっと下品に大きく拡がるのがいやらしすぎる。
「ハァ……ハァ……待って……お願いがあるの。それを、あ、あの……」
清香が言い淀んだ。見れば顔がゆでダコ状態になっている。
「……あ、あのね。イクときに一気に引き抜いて欲しいの。ずっとやってみたかったの」
「……」
じゃあ、安全日とか関係ないじゃん。
ツッコミを入れたくなったが、しかし……と、元の世界の真面目な彼女のイメージを、重ねてみる。品行方正で折り目正しい優等生の彼女がこんな格好を晒して……。
「ね……お願い♥」
……エロい♥　ど変態万歳！
欲望をにじませた媚びるようなその懇願にチンコが諸手を上げる。
「わかりました……あっ、でも、それならゴムつけないと！」
「あっ……そうね。ごめんなさい、避妊は女のエチケットなのに忘れていたわ。許してね」

変態は変態でも、清香は礼儀正しい変態だ。
そう言って、枕元に備え付けのコンドームを手に取り、袋を破ると、彼女はぎこちない手つきで中身を宏輝の亀頭に押し当てた。竿を軽くしごきながら陰嚢に口づけをし、これから胎内に導き入れる男根に、まるで愛しい人への贈り物を包装するように、クルクルとスキンを被せてゆくその作業を終えると、再び尻を高く掲げて大きく股を開く。
濡れそぼった陰唇が、アナルビーズのプラグの下で涎を垂らしてぱっくりと口を開けた。
「早く……もう、いいのよ。ねえ、もったいつけないで……私、さっきから子宮が疼いて、切ないの……」
後ろを振り返って、上気させた顔を見せながら女性自身にチュクリと指をひと挿しする。
「し、白鳥先輩っ……」
宏輝は、熟れた牝肉の中心に肉先を押し当て、そのままずぶりと一気に腰を沈めた。
（挿った……白鳥先輩のオマ〇コに、俺のチンポが挿っていく……！）
ずぶっ、ずぶずぶっ……ずぶっ！
最初のひと突きは慌てずにゆっくりと。
こないだ目にした処女膜が押し開かれる破瓜の様子をを頭に想い描きながら。
にゅち……ぐっ……ぢゅぷ……ぶ、ぷ、ぷぐうっ……。
コンドームの滑らかな薄膜越しに、摩擦と圧力で押し広げられ、裂けていくバージンを感じる。

（奪ってる……今、まさに奪っているんだ。清香先輩の純潔を……！）
言い知れぬほどの征服感に満たされながら、清香を開通させていく。
「あ……ああっ……挿って来てる……！　オチンチンが私の中に……あはあああんっ！
処女から、女に……今、なっているんだ……私。あっ、あっ……あっ……ああああ……」
噛みしめるようにロストバージンを味わう清香が感激でお尻をピクピクと震わせた。
……ぶちいっ！
弾けるように喪失われる純潔の境界。女となったその部分に、深いくさびとなって男が埋まる。その結びつきをもっと強くと、出入り促す腰使い。突いてやればその度に激しく、摩擦すれば、ますます狂おしく！
「んはあああっ！　オチンポ、すっ……ごぉいっ！　んあぅうっ……ひとつになってる……奥まで届いて……はあっ……あ、ああっ……子宮っ……子宮にキスしてくる……」
初めて体験する膣内への刺激が、清香の性感を呼び覚ましていく。
「はあっ……これが……セックス……ん、ああ……男のチンポ……こ、こんな……想像と……ぜ、全然ちがっ……違う……も、もっと、ずっと……ああああんっ！　気持ち良いっ！
擦るの……私の中のヒダヒダを……あ、ああまたっ……擦る……めくられるっ」
パンパンと皮膚を打つ音に酔い、肉体が新しく学習した快感に翻弄され乱れ悶える清香。シーツをぎゅっと握り締め、ベッドに押し付けられた上体の下で、形良いおっぱいが押し潰されている。代わりに、完璧な美しさの背中に浮かび上がった脊椎のラインが、優美な

弧を描く。それはくねくねと揺れ動くダンスで宏輝の目を楽しませてくれた。
「壊して……あっ、ああんっ……オマ〇コが壊れるぐらい、暴れて欲しいのっ！」
「くうっ……せ、先輩っ！　白鳥先輩っ……！」
「あはあうっ……そ、そうよ……か、掻き混ぜるように……んあっ、そう……そうすると……当たるのっ……お尻の中のビーズと……オ、オチンチンが……ああっ……ぶつかって、ゴチゴチいうのよおっ……はああんっ……凄いっ……こんなのっ……グリグリする……オマ〇コといっしょに……お尻の中……か、感じちゃうぅっ……」
ぐちゅっ……ぬぽっ……にゅちっ……ずぽっ……ずぽずぽっ……ずちゅうっ！
うねる背中に覆いかぶさるようにしてストロークを深くしてやる。清香はいっそう乱れ、ヒクヒク蠢くアナルからは、ずぴゅっぬぴゅっと腸汁の飛沫が散華し、宏輝が抜くまでもなく自然にアナルビーズが菊座を拡げて押し出され始める。
「ひゃうっ……んはあっ……ああーっ！　貫かれてる……ああっ……貫かれてるわ、私！　おほうっ……んんんっ……お尻も……燃えてるみたいに熱いっ……はあっ……ああああん、う……疼く……堪らない……お腹、どうにかなっちゃいそう……んはあああ……イ、イキそう……き、来ちゃう！」
「先輩、凄く……いやらしい……お尻の穴からボコボコ、卵を産むみたいに出てくる……」
「これぇ……気持ちいいの……はあんっ……お尻、拡がるの、わかるの……ああ、いくっ……イクッ……イクわっ……私、イッちゃう！」

ひとつずつ、ぷりゅっぷりゅっと震えながら飛び出してくるビーズの連なり、その度に大きなよがり声を上げる清香の絶頂が近い。約束は、そのとき引き抜くこと……しかし、宏輝は丸い尻の中心でヒクつくプラグを掴むと、逆にそれを不浄の穴の中へと押し戻した。

「ひうううううっ……んほおおおっ！　ひゅごいいいいいいいいいっ！」

腸内への予期せぬ逆流、チンポとアナルビーズのW突貫に清香が歓喜の絶叫を上げる。膣壁越しに直腸内をゴリゴリと異物が通過していく感触が肉棒にも伝わって来た。

「駄目っ……駄目それええぇっ、それ、感じすぎるわっ……ほおっ……おおおん……」

「元々、自分で挿れたんでしょう。感じまくってる先輩のスケベな顔も、可愛いですよ」

「ああんっ……そ、そうなのっ……私、どスケベなのっ！　風紀委員長なのに、こんなにエッチで、変態なの……ああっ♥　お尻とチンポ、両方でイッちゃう、イカされちゃうっ！」

「いくよっ、先輩……」

宏輝はフィニッシュとなる激しい抽送を浴びせながら、快楽の玩具を今度は一気に引き抜いた。

ぶりゅりゅりゅりゅりゅりゅりゅりゅりゅりゅりゅりゅりゅ……っ！

「はおおおおおんっ！　お尻ぃっ……もこもこぉっ……かっ、解放されてっ……んはあああっ、あっ……♥　ああっ……♥　あああああ、あっ……イグッ……ドスケベ風紀委員長、イッ……くうぅぅぅぅぅ！」

清香の頭が跳ね上がる。

この続きは製品版をご購入の上、
お楽しみください。

編集・発行
株式会社キルタイムコミュニケーション
〒104-0041　東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル
TEL03-3555-3431（販売）／FAX03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改さん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。
ⓒKILL TIME COMMUNICATION　Printed in Japan

http://ktcom.jp/

二次元ドリームノベルズ

とろ蜜美女めぐりの桃色バスツアー

幻想魔王シャイン・ミラージュ

日常に密着したエロス、リアルな舞台設定で送る官能小説レーベル！

戦うヒロインを屈服させちゃう
かなり過激な
陵辱系ライトノベル！

フリーダム120%!?
ジャルにとらわれないドキドキ★ラブ

リアルドリーム文庫

あとみっく文庫

呪詛喰らい人師

キルタイム・コミュニケーション小説シリーズ

あなたはどのタイプ？

異世界でチキる妹ちゃん

ハルキ

二次元ぷち文庫

あの人気作品の外伝作品もあり！
電子書籍でしか読めないキッチンベル！

「小説家になろう」の男性向けサイト「ノクターンノベルズ」から書籍化！

ピュア・キラブラブな
ハーレム系
ライトノベル！

姫騎士がクラスメート！

ビギニングノベルズ

二次元ドリーム文庫

KTC 編集・発行 キルタイムコミュニケーション
〒104-0041 東京都中央区新富1-3-7 ヨドコウビル TEL:03-3555-3431(販売) FAX:03-3551-1208

▶最新情報は公式サイトへ！ キルタイムコミュニケーション 検索